

文化財調書

種 別	有形文化財（歴史資料）
名称・員数	ことひら じんじゃてんぼうさんねんはいかいけんがく 金刀比羅神社天保三年俳諧献額 ・ 1
文化財の所在場所	久慈市湊町 13-90 金刀比羅神社

「金刀比羅神社天保三年俳諧献額」は、天保3年（1832）7月に金刀比羅神社に奉納されたものである。

願主は、^{がんしゅ}白野・^{はくの}白意・^{はくい}嗟忠・^{さちゆう}魯仙・^{ろせん}橘平・^{きつぺい}馬来の久慈の俳人6名で、願主らの句が中心となり、春51句、夏30句、秋11句、冬8句、^{ぶんいん}文音（書簡で寄せられた句）9句の計109句からなる。

句を寄せた俳人の範囲は、久慈・野田・大野・八戸・一戸・福岡・沼宮内・岩泉・五戸・野辺地・宮古の他、仙台・江戸・京都にまで及び交流の広さを知ることができる。

八戸藩7代藩主南部^{のぶふさ}信房は「俳諧の藩主」として知られ、幼い頃から俳諧をたしなみ研鑽を重ね、江戸常^{じょうづめ}詰の用人窪田半右衛門（俳号は楓台互来）に師事し、天明3年（1783）立^{りつき}机（俳諧の宗匠としてお披露目）して互^ご扇^{せん}楼^{ろう}畔^{はん}李^りと号し、文化6年（1809）に花咲亭畔^{はなさきてい}李、文化12年（1815）頃^ごに五梅庵畔^{ごばいあん}李と改称した。

軸は五梅庵畔^{じく}李と五梅庵裏^{りしゅう}婦李州によるものであり、軸となる二人の句を掲げて句会を開催したものである。

としは世のたからの数ぞ雪に梅 五梅庵畔李

日は松の上におどって弥生かな 五庵裏婦李州

李州は、信房（五梅庵畔李）の側室で、俳諧を学んで花月堂^{かげつどう}李州を賜り立机を許された。

額は、縦52cm、横387cmの大額であり、^{けやき}櫨の一枚板に^{ぼくしよ}墨書されている。

「天保三年^{みずのえたつ} 壬辰七月吉日 梅星軒^{ばいせいけん}八重歳現書」とあり、80歳の梅星軒馬来^{きごう}の揮毫によるものである。

大額で句数も多く、江戸時代後期の久慈地方における俳諧文化の隆盛を伝えるものであり、藩主の句が掲載された貴重な俳諧献額である。

【参考】

藩主の句が掲載された献額

- 洋野町大野^{なるいかずち}鳴雷神社「鳴雷神社文政6年（1823）俳諧献額」（洋野町指定文化財）
- 八戸市長^{ちようじゃさんしんら}者山新羅神社「五梅庵畔李公「国光の発句」献額」（八戸市指定文化財）

※ 参考資料（文化財調書のゴシック部分の解説）

【有形文化財の指定区分（文化庁）】

建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、**歴史資料**、考古資料

【用語の解説】

○白野

中野嘉右衛門。^{せい か さい}星華齋・^{しゅうかんしゃ}秀冠舎と号す。天保の頃、久慈地方の俳諧の中心的人物と推定。

○白意

八日町、晴山重三郎。^{たちばな や}橘屋。^{せいせいけん}星誠軒と号す。久慈の俳人。

○嵯忠

嵯峨忠右衛門。久慈の俳人。

○魯仙

嵯峨吉兵衛。久慈の俳人。

○橘平

晴山橘平。晴山亭と号す。文政・天保（1818～1843）頃の人。

○馬來

久慈の俳人。寛延2年（1749）生まれ。^{こうあん}中野綱庵。^{ばいせいけん}梅星軒と号す。

文化・文政（1804～1829）になって円熟の句境に達するようになった。

職業は医者。八戸藩7代藩主南部信房とは、^{のぶふさ}医者・俳人として親交があったという。

言い伝えによれば、信房が病気になった時、中野綱庵という名医が久慈にいと聞き、呼んで治療をさせたところ、白紙を一枚ずつはぐように快癒したという。

また、ある年、信房が藩内の領民の状況を馬來に聞いたところ、即座に「白菊やこぼるる露もみな白し」と詠んだという。信房は、この句にたいへん満足し、お褒めの言葉を賜ったという。この句碑が門人等の手により文政11年（1828）に建立され、現在、長福寺にある。

○文音

書簡で寄せられた句。

○南部信房

明和 2年（1765）6月15日、誕生

天明 元年（1781）2月14日、藩主に就任（17歳）

天明 3年（1783）1月15日、^{りつき}立机、^{ごせんろうほんり}互扇楼畔李と号す

寛政 8年（1796）2月13日、藩主を退任（32歳、16年間藩主）

文化 6年（1809）3月～6月、^{はなさきてい}花咲亭畔李と号す

文化 12年（1815）頃、^{ごばいあん}五梅庵畔李と号す

天保 6年（1835）5月12日、江戸にて没す（71歳）

○軸

軸となる句を掲げて句会を開催する。